

国立国語研究所学術情報リポジトリ

閉会の挨拶

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 迫田, 久美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000922

本日は大切な時間に、ここにお集まりくださいましてありがとうございます。最後に、一言お礼を申し上げます。と思います。

このプログラムは、私たち日本語教育研究・情報センターが企画しました。この企画をするとき、どのようなことをキーワードにしようかと考えて、グローバルゼーション、日本語、コミュニケーション、特にコミュニケーション能力を上げようと考えました。それはとても簡単なようで、じつはとても難しい能力だからです。所長のお話の中にもありましたが、新入社員に求められる能力を各企業に聞いたところ、五百二十人の企業マンの八〇%が、「コミュニケーション能力」をあげ、第二位は「主体性」で六二%でした。圧倒的な差をつけてコミュニケーション能力が求められています。

さきほど申し上げましたように、留学生の日本語能力検定試験の内容も、コミュニケーションの運用能力を問う内容が変わってきています。

また、所長がコミュニケーションの語源について述べましたが、私も調べてみて、同じようにラテン語が語源であることがわかりました。所長は「分かち与える」という表現を使いましたが、「共有する、共通する、一般的な」という表現もありました。このなかで私は、「共有する」という言葉を大事なポイントとしてあげたいと思います。つまり、互いに共有すること、つまり外国の方が日本語を学ぶことで、共有する部分が広がっていきます。鳥飼先生は「外国語を学ぶことで窓が開かれる」とお話しされました。カール先生の話でも、お巡りさんに呼び止められてどのように話が展開したのも、彼が日本語を使えたからです。

莫先生とお話したとき、「日本語を学ぶことによって、今までほんやりとしか見えなかったものが、眼鏡をかけて周りがよりはっきり見えるようになった」ということが印象的でした。そして、私たち日本語母語話者も外国の人々の日本語をもっと理解することによって、いろいろと共有する部分が広がっていくと思います。

そして、西原先生のお話を踏まえると、私たちのこれからの日本語を見つめる視点をかえていかなければならない。つまり、黙っていてもわかる、以心伝心の時代から、上手に話すことが求められる時代へとかわっていくの

ではないでしょうか。そういった意味で、共有する、共有を可能にするためには、私たち自身も変わっていかなくてはならないと思います。

本日のこのフォーラムによって今日のこの出来事を共有しあい、そして、さまざまな日本語を認め、上手な日本語の使い手となるための一歩を踏み出す機会となれば、幸いです。これで、最後の挨拶したいと思います。本当にありがとうございます。